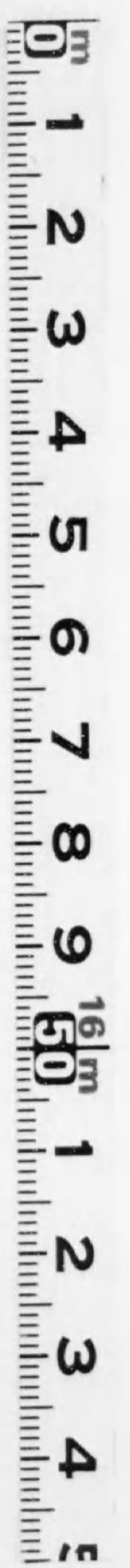


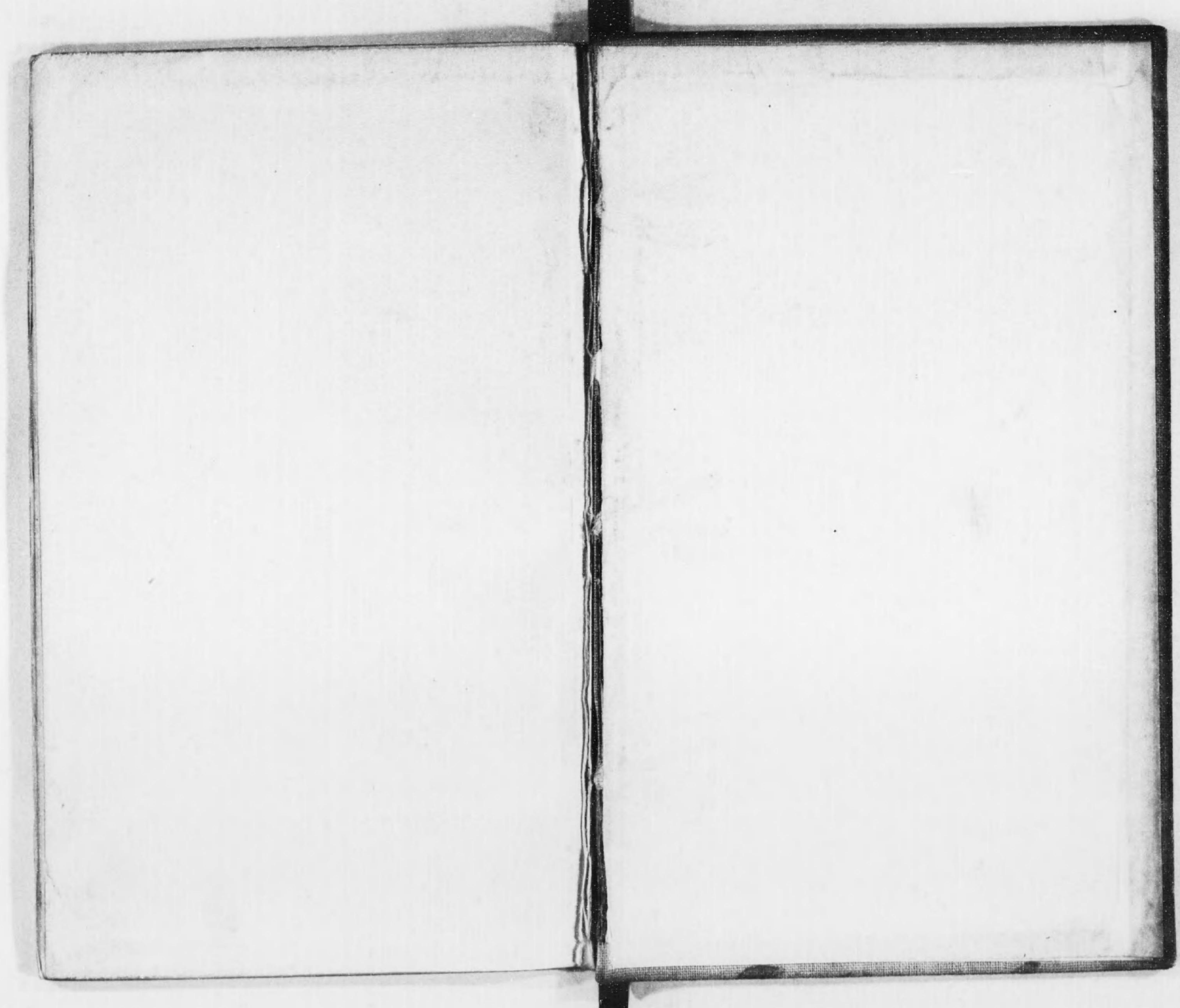


501
122



始





故郷の山にねむり給へる父と母と
兄と弟と二人の甥の靈前にこの一
巻を捧ぐ

裝幀及繪畫

川端龍子氏

50/-122



地

懷

橋

田

東



大正

10 年 20

内交



六つの墓

—自序に代ふ—

ひとり生き残つてゐた兄が、また、とうとう死んで仕舞つた。今年四十二の厄年であつた。

去年の春、弟は二年餘の病苦と懊惱の末に闕え死んだ。其死際の事どもを看病に歸國してゐて、遂に弟の死水をとつた妻が細々と書いて寄越した時、私は私の家に降りかゝつて来る災厄ももう之れでおしまひだらうと思つた。すでに大正五年の夏父をうしなひ、其年の秋母にわかれ、引續いて兄の二人の男の子が死んだ。一年の内に四つの棺を同じ家から昇き出した。村社の寺山の墓場には新しい四つの墓石が並んでゐた。村の人達は、あの皆な打揃うて正直で信心深い私の家にとりして斯うも不幸が續くであらうとおどろき憫んでゐた。兄は人に顔を合せゐるのも耻しいといつて、天からの不幸を自らの罪惡でもあるかの如に、世を憚つてゐ

た。斯んな場合に弟が死んで又一つの不幸を加へたのであるから、妻の手紙を繰り返して、家の不幸を思ひめぐらした時、私の家に降りかゝつて来る不幸も之れで結末だらうと私は思つたのである。

然るに不幸は未だ結末でなかつた。弟の一週忌さへ未だ来ないのに、今年の四月兄がかりそめの病から又死んだのである。兄は無學ではあつたが、生れつき親切で善良であつた。正直そのものであつた。四十二年の生涯中たゞの一度も人と争つたことがなく、塵ほどの不正直をはたらいたこともない。唯だ一寸ぢに人げんの道をまつすぐに歩いて来た。従つて兄は親類の者からも村人からも愛された。その兄がかりそめの病氣で急に死んで仕舞つた。墓がまた一つ増して六つになつた。寂しい松山の頂に親子兄弟が枕を並べた六つの墓！ 私は考へてくたゞおそろしい氣がする。

ひとり生き残る！ ほんとのひとりばつちだ。肉親といふものは私には最早や一人もない。

奥はひとり来ないといふ誰が四年にあるさうだが、全くそんな氣がする。が、

暴して然りとすれば、元來あまり強健でない私も安心は出来ない。いつ死のかも知らない。なに、そんな事があるものかと心では思ひながらやはり氣持のいいこととはない。不幸が續くと人の心は弱くなる。

父は小心であつたが、善良な心の持主であつた。少しは村の人々の世話もした。母はやゝ短氣ではあつたが、親切な思ひやりの深い人間であつた。弟は母の血を以て怒りっぽい性質ではあつたが、正直で勤勉であつた。兄ときては、前にもいふ通り、まったく善良と正直そのものであつたといつてもよい。この點では千巻の書を讀破して小學教師から中等教員の試験に合格した弟も、高等學校を経て大學を卒へた私も到底兄の足もとにも寄りつけぬ。私は生來他人を憎み得ない性質の人間である。他人に對し殆んど一視同仁的に何等の擧り好みもない位に博愛である。併し私にも、稀には嫌な、にくむべき人間がないこともない。然るに兄には一切そんな差別はなかつた。村ぢやうの惡まれ者をも兄は憎まなかつた。敵をも愛するといふひろい心を見ればたしかに有つてゐた。學問がないから理屈から棄たのではないが、圖らずして兄はそれを實行してゐた。だから兄は誰からも愛

せられた。重難となるや、村中の者は寺へ集つて兄のために病氣の平癒を祈つてくれた。愈死んだときいてみんな私の家に集つて来てくれた。死んだ時は慟哭のこゑがあたり近所にきこえる程におこつた。葬列が往來に出た時は、村人はみな庵に立ち出て、泣いて見送つてくれた。きくともなく耳に入る人の噂はみな生前の兄の性行を褒めた、へる言葉であつた。其後私に道で逢ふ人々は誰もかれも同じ様に兄を惜んで見舞の言葉をいつてくれる。それが決して通り一遍の挨拶やお世辭でなく、心よりのくやみを言つてくれる。私はそれを素朴な田舎の人の眉宇の間に讀んだ。

私は思つた。兎に角、私の親兄弟はみんな善人ばかりである。「惡」の足跡はその生涯のヘエツの上に塵ほども印されてはゐない。かゝる人々の上に神は何故かくの如く不幸を持ち來すのであらう？ 善因果は決してアテになる人世の法則ではない。私の村でも父や兄よりずつと人の惡い、正しい道を不正に歩いてゆくやうな人間が富み、榮え、人の上に立つてゐる。何故のこの矛盾であらうか、私は少しく悲觀的懷疑的な考へを起すやうになつた。

私は又思つた。私はともかく大學を卒業した。少しは物もかき置も讀める。兄は目に時ど一丁字もない程の無學な人間であつた。けれども徳の一點に至つては私は到底兄の敵でない。假りに私が死んだとしても、私は兄が親類や村人からうけたほどの愛情の情を私のぐりから受けることは出来まい。形式的挨拶や社交上の儀禮はうけるかも知れないが、ほんとの「こゝろ」の見舞やくやみをいつてくれる人は少ないであらう。愛は要求すべきものでなく、光被すべきものであることを、私はよく知つてはゐるが併しやはり寂しい心になる。

私の家の不幸は私が分不相應に學問なぞしたのが原因かも知れない。父の力で私を大學まで卒業させることは無理であつた。其無理を押し通した爲に、私の少年時代には土地を買増し倉を建て、村人から褒められた程の私の家産は私の大學に入る頃から傾き始めた。やつと學校を卒業しても中々いゝ口はなかつた。其うちに私は病氣に罹つて一年近く疊の上で暮らした。青山にゐた頃である。終ひには衣類を身して米のしろに代へた程であつた。父や母はそれを心配して急に老い衰へた。遠く隔て、私の病狀のよく解らぬのが餘計に父母の心を苦しめた。東京で

私が病氣と貧苦に悩んでゐる間に、郷里では兄の二男が（長男は既に死んでゐた）脊髄病に罹つて歩くことが出来なくなつた。醫者も薬もと百方手をつくしたが効果なく、終ひには畳の上で腹這ひになつた儘半日泣き續けた。

この悲惨な甥の病氣が暗い家を益々暗くした。家の者の心を苛立たせ、悲しくさせ、時にはそれが原因で親子夫婦が互に暗い心でたまつて時を過すやうになつた。すでに長男を亡くした経験があるので、兄や姉が二男を可愛がることは一通りではなかつたが、それにも増して母が孫を思ふ心を深かつた。甥のことから篤情の衝突なぞあつた日は、父は辛い顔して黙つてゐた。姉は氣短かになつた。兄はじつと黙りで我慢してゐた。母はそれを見ると、すぐに、甥をおぶつて寺詣りに出掛けた。家から寺へは十町許であるが、坂道である。甥はすでに十歳、老いた母が負ふには重いのである。母はそれを我慢して寺に行く。母は若い時から厭がわるかつた。老いては次第に病くなつた。それが心の通勞からだんだん病くなつて行つた。父は持病の喘息と私や家のことなどを思ひ續けた爲憂鬱症に陥つてゐたが、心ばかりの還曆の賀をすますと急に病で死んだ。

父危篤の電報を受取つて、妻が私に電話をかけた時、私は横濱商業學校の教壇に立つてゐた。私は急いで歸國した。それでも三日間の看病が出来た。父の葬式をすませて私は上京したが、ふた月とたゝぬうちに母が父の後を追うて他界したのは何だか私には不思議な事のやうに思はれた。母の死んだ時には私は自分の病氣の再發を怖れて歸ることが出来なかつた。

兄の三男は伶俐な生れであつた。二男が餘程快くなつて、松葉杖を突いて學校に行けるやうになると、三男は兄の靴を自分が持つて後に尾いて學校に行く。雨の日などは、跛足ひきひき歩く兄に傘さしかけて自分も急ぎ並んで行つた。そのいぢらしい兄弟の姿を村人は毎朝學校に行く森の下道に見た。兄や姉はそれを見てよろこんだ。併しそれも長くは續かなかつた。母の死後三男が急に腸加答兒を病んで死に、續いて、二男が弟の後を追つた。二男の死は止むを得ないとしても三男の死は思ひがけぬ災厄であつた。と一角、一年の間に四つの棺を出した。私は東京にゐて兄の心と思ひやるばかりであつた。

まうかうしてゐるうちに、今度は向ひの村に養子に行つてゐる私の弟が、多牛

の勢力漸く頼ひられ、中等教員選定試験に合格して、上京せんと國の港まで行つた時、急病に罹つて町の病院に入つた。経過がおもほしくないので、間もなく退院し、養家へ歸つたが、感病ゆゑに養父母や妻から嫌はれ、遂に兄の家へかへつて来た。弟は短慮で一尅であつた。病氣のためにひがみもした。養家の仕打、妻の無情、友や村人の彼に對する冷酷な態度に昂奮して、兄や姉に當り散らした。私へも毎日のやうに慫へや憤りの手紙を寄越した。兄はじつと我慢して看護にとめたが、姉はさうも行かぬと見え、時々衝突した。養家との關係は次第に面白からず、手紙では埒があかぬので、その年の秋私が歸國して、幾度もの談判の結果遂に離縁して了つたが、養父母、殊にも子まで生じた妻の無情に對しては弟は恨み骨髄に徹する思ひであつた。私は妻と共にしばらく滞郷して弟を慰めつ、看病した。廣い世界に弟は唯だ私一人を頼みとしてゐた。私は病床の彼と屢文書や思想の混なぞを語り合つた。弟は、とゝいれば病苦も忘れて樂しさうであつた。弟は兄には應當り散らしたが併し兄はそれをじつと忪えて、自暴になつた弟を看護した。姉とは殊に不和であつたが、それを兄はど、することも出来なかつた。其

間の相睦し合ふ心と運命の悲劇を、私は今も思ひかへして怖い氣がする。兄の心がこの間に次第にくづかれて行つたことは争へない。

弟は倉のかたへの四疊半を病室にして、そこに臥つてゐた。病つのは寢返りを打つさへ容易でなかつた。便所にも起てなくなつた。兄の看護を外にしては誰れ一人心から慰めてくれる人もなく、冷めたく固い床の上に、世を怨み人を恨んで絶望と苦悶の裡に泣きながら死んで行つた。私の妻が彼の死ぬる月に歸省して看護してやつたのがせめてもの慰めであつた。

弟の死後一年たらずの間は不足ながらも兄にとつては先づ幸福であつたらうと思はれる。妻を愛し、一人の女の兒を育て、好きな酒も呑み、食物にも少しは贅澤してゐたさうだ。そのうちに男の兒が生れて實と名づけた。その時こそ兄はよろこんだであらうと想像される。暗い家にも平和と幸福が来るやうに思はれた。併しその希望の時はあまりに短かつた。新しい家を建てることや、生れた男の兒の誕生祝ひをすることなど、兄と約して置き乍ら私はそれを果たすことが出来なかつた。この春こそ花の下で一杯飲まう、飲みませうと互に約してあつたことも

今はすべて空しくなった。兄も残念であつたに違ひない。私も残念である。

ふるさとの兄をおもへば風竹笠裏山にしてさやげる
聞こゆ

樵の實の屋根におつるをきゝながら細縋ひてあらむ
冬の夜寒を

保けたる洋燈の下にあつまりて親子さびしく夕餼食
すらむ

これは私が一昨年の冬を憶ふて作つた歌である。この寂しい兄の生活はあまりにその終りが早やかつた。かたむく家を支へるべく兄の力は弱かつた。去年の冬私は滿鮮支那へかけて二月ばかり旅行したが、兄へはあまり手紙も書かなかつた。兄は私の病状の自體を心配して、毎日私からの旅の消息を待つてゐたさうである。私は今しみじみと自實の心に浸つてゐる。
噫、あはれた父は死んだ。母は死んだ。二人の甥も死んだ。かなしき弟も死んだ。氣の毒な兄も遂に死んだ。さうして私には子がな。私はまったく孤獨だ。

ひとりこんじやうに生き残つてゐる。残された私は、これからの私の道を唯だひとり寂しく歩みつゞければならぬ。

大正九年五月十日

東京大森八景坂にて

橋田東聲

郊外移居

大正五年作

目次

竹林月夜	七
漱石先生を憶ふ歌	三
粟山の演にて	二〇
母を憶ふ	二五
大森移居	二
父逝く	七
宙返り	五
ゆふかけ	五

試験の歌.....元

鴨.....三

南 京 町.....毛

入海のほとり 大正六年作

折にふれ.....二

品川の壺場.....三

五月霽れ.....四

品川驛.....五

深夜の宮城.....六

潮來出島.....七

大 風.....八

春 戸 の 畑 大正六年七年作

山ふところ.....三

背戸の畑一.....八

背戸の畑二.....七

春近き日に.....九

築地河岸.....七

今村沙人を送る.....九

朝鮮人參を煮つ.....一〇

代々木野にて.....一〇

思ひ出.....一〇

中島の春.....一三

木蓮の花.....一九

山 皴の光

大正七年作

馬市一	一五
馬市二	一六
五月の野を行きて	一七
洗足池	一八
山皴の光	一九
近江八景一	二〇
近江八景二	二一
爐邊	二二
爐邊一	二三
爐邊二	二四

西の樹空

大正八年作

平和第一春	二七
黎明の死	二八
くすり湯	二九
農村講演會	三〇
櫻牛の墓に詣つ	三一
峽の雪	三二
餅	三三
西の樹空	三四
緑の朝	三五
犬の子	三六
夜の向日葵	三七

兄

の 死

大正九年作

真 心 三三

月 夜 に 三九

身 邊 近 事 三五

憂 橋 三三

寒 潮 三七

朱 泥 光 三四

開 鐵 橋 二六

彼 等 は 踊 る 二五

兄 二五

兄 二五

郊外移居

大正五年作

大正五年一月より
大正六年三月まで

ゆふかげ

夕かげにおのれ揺れるる羊齒の葉のひそや
かにして山は暮れにけり

ちちくづる、蚊柱おほし没つ日のうすく落
ちたる羊齒の叢生ひ

水汲みてもどる月夜の坂道に弟とおもき桶
代へにけり

藪の上にまちかくかゝる株虹の太き柱をみ
つつ坂のぼる

提灯をけしてあゆめば淺茅生の野ぞら明る
き草月夜かも

宙返り

大正五年一月十八日青山にて米人スミ
スの宙返りをみる

冬の氣のすみたる空にプロペラの高鳴るさ
こゆ聞きのよろしさ

悠然と澄みのぼりゆく機の下にはるかに雪
の富士遠く晴る

6
機は今空のおくがに澄み入りて宙返らんとすみな仰ぎたり

ふとわれにかへりて目守る掌底ににぎりつる汗そのあぶらあせ

月の夜の片側町をもどりつゝかすかにきくは地下水道の音(或る夜)

父 逝 く

ひさかたの天ゆく大日かくろひて
六月七日父死にたまふ

やうやうに脈よわりゆく父の手をたにぎり
持てとせんすべもなし

7
しまらくもこの手放たば死にゆくと瘦せ衰
へし手をたゝに握る

8 歸りつる吾を一日見しよころびに何か言は
んとしはしつれども

小夜床にいのち死にたる父の顔に揺れつゝ
うつる蠟燭の灯り

通夜の夜の明け近からし遠小田に蛙鳴く音
のすみて聞こゆる

ふるさとの青山に月は照らせれどわがなき
父にまたあはめやも

はふりをへていま離りくる目の下に麓遠々
し村の灯が見ゆ

9 雨ぞらをほとゝぎす啼き聲落つる行手の小
野を人は急ぐも

いにしへに父をつくりし裏山の眞竹鉾原見
ればかなしも

青山に病む

醫師がり妻はしらせてひとりをれば夕べを
雨の降りいでにけり

大森移居

病やよくなりて四谷より大森に
うつる。三坪ほどの庭畑あり

庭畑の土堀りならししみじみと大根の種子
を蒔きにけるかも

この森に家居て畑たがやせばいたづきは早
やいえんとすらし

12
けさ見れば大根の芽ぞ萌えいでたりみなか
いまりて眞土の畦うねに

蕪の葉の青虫とると今朝もかもあかつき早
くわが目ざめたり

茄子もぐとあかつき露にぬれにつゝ妻のよ
ろこぶわが茄子畑

わが庭の蕪畑の月夜良み浅夜をおこるこほ
ろぎのこゑ

庭草のおのづからなる葉のそよぎ雨來らん
として雲のゆきはやし

13
來るともなく養鶏場に來たりけり生みたて
の卵買ひてかへるも

14
ふた葉菜をわが間引きをればゆふべ空照り
美し虹のかゝりたり見ゆ

水上はやゝに明るみいちじろく木の葉そよ
ぎて月いでにけり(折にふれ)

母を憶ふ

かりそめに病むとはいへど老いませばかり
そめごとと思ひかねつも

15
ふつかみか雪ふりつぎぬふるさとに母病み
たまふこゝろはもとな

11 病む母の枕にかよふ浪の音たかければ母は
眠むられざらむ

弟のふみ読みさし置きてすかつちをひねれ
ば庭に小雪ふる見ゆ

ふるさとに父母をおきてぬばたまの夜わた
る月をわが幾夜見し

父逝きて未だ幾日もあらぬに、弟につれられて
海濱にありし母の俄に危篤に陥れりとの飛報
きたる。驚けどもわが病未だいえずして歸國す
る能はず、たゞ病氣平癒を祈念せんと程遠から
ぬ池上本門寺へまゐる

ふるさとの母のいのちをこひ祈るとこの夜
をいそぐ池の上の道

17 本門寺われと吾孀がたらちねの母を祈念^いる
とのぼるきざはし

18 ひたすらに心は急けど小夜ふかし坂の中途
に息つきあます

つゝましく堂をくだれば荏原のや秋ふけし
野の夜はくだちたり

母道に逝きたまふ

いまのこの歎きをせむと幾年を異郷に經し
か父母をおきて

池上の山かけ小沼のさゝ濁り咲く花さぶし
亡き母おもへば

19 はゝそばの母に見せむとわが園に植ゑし秋
萩は咲けどもあはれ

葉山の濱にて

晝闇を湛へそめたる磯浪のうねり光りて照
れる岩の面

磯岩の間まにうちよる潮のあかるくも湛へそ
めたり晝闇けにつゝ

相模の海うみしら浪の立ちのかなしきはひとり
いゆきて見ればなるべし

寄る波の白しろ秀うさわだち岩のあたま見えかく
れする夕風のなかに

21
わたつみに天の夕風ふきくだり吹きしやま
ねばあまた波立つ

22 葉山のや名島の磯による波の湛へかなしも
岩かげにして

晝深み島の荒磯の岩かげに火の燃ゆるこそ
かなしかりけれ

海神の森にさわぎしむら鴉いま大空にあつ
まるあはれ

漱石先生を憶ふ歌

笹の葉にさやに雨ふり小夜ふけと夜のくだ
ちに君がしのばゆ

23 笹の葉にしぐれの雨のいたも降りなにしか
もかくは悲しきものか

25 笹の葉に降る雨さびしいねがてに君をしの
べばおんこゑきこゆ

裏山にこがらしきゝて一夜泣きしそのあか
つきの霜しろく見ゆ

こがらしの夜はふかしも君しぬび涙ながし
てゐたりけるかも

✓ 裏山によもすがらきく木枯の音はやみぬれ
ど吾が思ひ堪へず

✓ まよなかをふと眼ざむれば面影のまなかひ
にありそのおもかげを

26 ✓ おん文を額面にしつらへりまづしかるわが
一生の寶とやせむ

歌會のうた

弟をつかひにやりて夕庭に薪割りをれば風の音つのである

川隈の群草うごき目すかせば夜網打つ人まさに歩みある

竹林月夜

郊外のこの竹林の小夜ふけを竹守のおちの唄うたふきこゆ

夏の夜の簀原こめて狭霧ふりきりにうるみて赤き月出づ

28 簾原にしづもり立てる群竹のこのもかのも
の月明りかも

月の夜の狭霧ふかしも簾かげを人語りゆく
聲ぞきこゆる

霧ふかしかすかにきゝてさぶしきは月夜板
橋人わたる音

試験の歌

大正六年教師となりて横濱商業學校
にありける時の歌より

冬木の影こまやかにさす硝子戸の戸ぼその
もとにももの書く子等は

20 朝の部室ひそまりかへりせんねんにものか
く子等の吐氣はしろしも

80 いちはやく答案かきて出で行く子のそのう
しろでの愛あなしかるはや

✓ ひそまりて物書くゆるにあちらこちらはなひ喰くる
きこゆ戸外はこがらし

✓ せんねんに答案つくるかたはらにわが立ち
てをり心かなしも

✓ なかに一人ひともろ類つめたき生徒せいとゐてしきり
に咳せきす風邪かぜなひきそね

もの書きてしづまりかへる室の外はみんな
みの風かぜ午ひるより吹き立つ

鳴

平福百穂齋伯より鳴の繪を贈られたるにうれしくてよめるうた

すめらぎの大内山をわたる風耳を澄ませば
松ふくきこゆ

大内山ゆ吹きおろす風のかなしきはこゝの
み濠の群鳴のこゑ

うらうらと春日照る水にうち群れて鳴あそ
ぶなり櫻田の濠

春寒し土手かげの鳴は沖つ面の陽のあるか
たへ泳ぎいでにけり

おのがじゝ皇城の濠にうち群れてあそぶ鳴
みれば心は和む

84 春日さす皇城の土手の芝の上にくつれる松
のかげのさやけさ

若松の新芽のみどり日に透きて土手の芝生
に影布くさやか

さくら田の水面あかるく春の陽をしみらに
溶びてあそぶ水禽

洲をあゆむこの青鴨はひとりなり群れをは
なれて何か寂しき

大宮のみなみの土手に生ふ草の緑をしきて
鴨ならび居る

85 大君の宮のみ濠にゐる鴨のこよひしき鳴く
波立つらむか

86 みかほりの漕へかなしき青淀に鴨なくらむ
かあかき月夜は

土手かげの淀の水面を霧ごめにこの浅夜さ
を鴨なくものか

こがらしの今宵さむけば山かげに浮寝やす
らむ大君の鴨

大正六年三月作

南京町

支那街に支那の子あそぶ菅の根の永き春日
は暮れずともよし

87 支那の子が遊ぶちまたのかはたれに灯のと
ほるこそ悲しかりけれ

おちまた風はたとやみたるゆふぐれを大同校
の鐘なるきこゆ（大同學校は支那人の小學校なり）

よこはまの南京町に友と来て雪梨酒飲めば
たのしきろかも

神奈川の夜の海さむし潮の音をひとり聴き
つゝ夜ふけて歸る

入海のほこり

大正六年作

大正六年四月より
大正六年十二月まで

折にふれ

木に花さき陽はうらゝ照る眼をあげよこの
天地にかなしみはあらず

41
ほのかなるにほひ迫るに見上げたる梢の花
のほひかなしも

品川の臺場

風ふけば海路をわたす夕潮の揺れわたるな
かに臺場島見ゆ

荒海に島をつくりしそのかみの人のいのち
はかなしきものか

お臺場の石垣に寄る浪の穂のくづれてはし
ろし夕霧の間に

潮騒のこゝの入江にうかぶ島臺場に夏の草
生ひにけり

43 夏草はやゝのびけらし波の上にけさ青く見
ゆ臺場島山

44 家もなきこの入海の島山も夏されば草に花
咲くらむか

總すべの山に湧く雲おほしいりうみの島の青草
見つゝたのしも

この日頃こゝろはうれし夏浪にいゆさかへ
らひわが見る島を。

つとめより疲れてかへる電車の窓廓の灯火あかり
あかるくし見ゆ

眼のまへに明りつらなる廓の灯さゆるあた
りは羽田の海か

46
五月霽れ

草の徑のしげり夏ぐさふく風にこゝろ清々
し朝露をふむ

露の玉あしもと近くこぼるゝは葉末おもた
くたへざるならむ

さつき野の萱原わけて朝くれば袖も袂も露
にぬれにけり

草の葉のまたま白露がせふけばくだけて光
る野は五月霽れ

47
夏草の武蔵大野の五月霽れこゝろゆらぎて
野に來し我れを

48 晝の風草をわたりにしづもればかすかに蟲
が啼きいでにけり

八千草の草のいきれにおのづからしんとし
て野はひそまりかへる

片岡のいさゝむら竹しぬの葉に羽根をまろ
めて雀は下りる

竹の葉に雀はおりてなきなけどすがたはみ
えすその竹の葉に

青蚊帳に影さす庭の吳竹のそよぎ幽かに夜
は闌けにけり(ある夜)

品川驛

この夏はすこやかにして吾があるとなわがは
らからに言傳なせよ(三首妻を國へやるとて)

駿河なる富士の麓に汽車入らば眼をあげて
仰ぎ見るべし

ふるさとの父母の墓に夏草の生ひたるなら
むその草を抜け

幾山河揺られゆられて来る妻をまちをるゆ
ゑに寂し潮騒(以下品川驛にて)

61 入海のうしほ聴きつゝ、夜の驛に遠來し妻を
待つとはするか

52 小夜ふけて汽笛の音きこゆひとり来て品川
驛に妻まつ我は

ほとほとに心死なしてゐるものをかなしく
は寄すれ夜の潮浪

妻まつとひとり來ぬれば夏の海の潮のはた
てに月いでにけり

いくそたび出で入る汽車の汽笛の音に心お
ちゐすわが行ちつくす

汽笛の音のまぢかくきこゆ汽車は今大井の
驛を出でたるならん

53 内海の瀬戸の淺夜に立つ浪をかなしく見つ
ゝ獨り來しか汝は

ふるさとの山の峽に母をおきてこゝろせわ
しく寄り來し汝を

○

水ほしくなり手さぐり行けば厨べに蟪蛄啼
きをりこのなく蟲を

隣すすりて灯蔭をすればてのひらのおぞや
みにくき我が掌を

瑞枝さす庭木のこぬれ霧はれてあなうれし
もよ雀の巢立ち

深夜の宮城

大内山の青山のうへに天垂らす秋の夜空は
 いくくしきかも

壘たなはる宮居の上にかたぶきてあまのがは
 星いやすみわたる

馬場さきの濠のみぎわの波の音ひたさぶし
 かも夜よ深ければ

うちなびく小松が梢しんのむら立ちも星かげに
 うきて寒しこの夜は

天地にすみきはまりてとりよらふ玉の宮居
 のかしこくもあるか

秋の夜はいやおごそかにあめしろす千代田
の宮はいつくしきかも

をろがめば涙ながるゝけだしくも松ふく風
は秋の風ならむ

灯ひとつ木の間をもれて大宮の松ふくかせ
は秋の風かも

すめらぎの光りあまねしひとり来て仰げば
高くたゝなふ神山

秋の夜の狭霧こめたる神山にこゑすみわた
り風のとわたる

潮來出島の歌

大正六年九月友と舟をやとひて佐原より
潮來へわたる。その時のうた

潮來のや秋風の江に舟泛けてかなしきこと
はあらしとぞおもふ

舟に寝てしづもりさけば真菰原秋風わたる
國しもつふさ

おのづから水にあそべる白鷺を今こそ見つ
れこの澤の江に

いままさにこゝに來て見る白鷺の皓々とし
てうつしけなくに

61 こゝに來て一羽の鷺をみるものか水に下り
立つ一羽さやかに

62 よしきりは一つ鳴きたり青江さす若葉しげ
なる葦原の中に

没つ日のこゝの入江にかなしきは草むら深
くこもる鳥の音

あし原に深くこもりてなく鳥は人に知らゆ
とももるにかあらむ

落つる日に水面あかるみさやさやと葦原を
風のわたるなりけり

奥田の浦の入江の真菰かせのむた水になび
きてそよぎをやます

63 天つ日の落ちんとしつゝ葦原の葦を染めた
りひともとひともと

64 水にうつる帯はしけやしくれなるの潮来乙
女は櫓を漕ぐたくみ

江の上に榜ざわかれつゝうたうたふ潮来乙
女のこゑののどけさ

沖つ洲の出島のはなに舟とめて蒲のはなさ
が葦原をわけ

蒲の花目にめづらしく咲きたれば葦むら分
けて舟曳かせけり

湖ちかき小學校のゆふ庭に子どもあつまり
繩とぶ見ゆる(十二橋を通る)

65 湖の上の小家かなしも夕さればあをき煙を
立ててかなしも

66 ほそぼそと煙はのぼる草の屋根舟の中より
ながめてゆけば

いくつもの橋をくゞれば水淺し米洗ふ子は
無花果のかげに

八十島の潮來の浦に船つけてゆふべ帆を捲
く音のさむしも

大風

はやち風吹きつつのりのきはまりて夜よのく
だちに人のおらぶ聲

67 寝しづもる大天地の闊深く外の面どよもす
あらしはも疾き

08 吹きあつる風のきほひのすざましく雨戸を
うちてねても寝をねず

その風のいや吹きすすさぶ真夜中をとなりの
赤兒泣くこゑきこゆ

草も木もふかれてなびく小夜更にすざまし
きかも赤兒の泣くは

風の音に目はさめたれどくまもおちず闇深
ければ妻よびにけり

はやち風行きをはやめて吹きたれば家ぬち
動きていねがてぬかも

09 風のなかに音をきゝたり背戸畑の槻の大木
の折れたるならん

70 ふく風のやゝにつのればやすからず起きて
灯ともす吾妻と我は

やうやくに火を移したる蠟燭の灯かげあや
ふしひまもる風に

あけ近くやゝ風ぎたれど戸を繰らず蠟燭の
灯を見つゝ小床に

銀座のやなぎ

きそまでは木垂れさやかにうちなびき朝吹
く風に揺りにしものを

71 西日つよし街路に裂かれ立つ木々の目にい
たいたし銀座のやなぎ

倒れたる街の柳に童子きて枝引きさやぐき
んざのやなぎ

ありし夜に妻とあるきて二日月を木の間に
は見しざんざのやなぎ

大正六年十月作

背戸の畑

大正六年七年作

大正六年十月より
大正七年四月まで

山ふところ

大正六年十月故國なる弟上京せんとして宿毛港に至り急病にかゝる。今同地の病院にあり。宿毛はわが幼時小學校に通ひしところ、又妻の郷里也。近時やや快しといへど、尙心安からず、思ひやり聽しみてよめる歌

75
この宵を灯とぼし居らむ汝れが住む山ふと
ころのかなしき家は

76 ふるさとの山の麓に汝が病むとおもへばか
なし離りてあれば

病みてあればおほかたびとに疎まれむつれ
なき人をねにいづなゆめ

愛^{あひ}しかるいのちをもちてうつそみの身をい
とほしみおろそかにすな

汝が宿の背戸の小山の小竹の群^{ぐん}に風さやぐ
らむ寒きゆふべは

秋ふけてやや肌寒き宵々を川瀬の音のさぶ
しくあらむ

77 川ぞひに竹簾あらむその簾ぞいにし日われ
の入りつるところ

78 たぎつ瀬の岩にせかるゝ青淀はありし日わ
れの釣せしところ

秋祭り町の太鼓のおもしろさおもしろきゆ
ゑかなしからむか

西の空にたなびく雲の片あかり近き港に汽
笛なるころを

はるばると汝れをみまひに來し長兄のこの
ころ身には恙なきかや

裏畑の柿なぞもちてはるばると徒歩來しな
らむかなしき長兄は

79 いにし年吾のまなびつる山もとの小學校は
ふりにけむかも

80 はかなきこの世に生きてうれしきはうから
やからの恙なきこそ

汝がやまひやゝおこたると聞く朝を一天晴
れて鳴く小鳥多し

背戸の畑一

同じ年に両親にはなれ二兒を喪ひ殘る一兒を
慈しみつゝふるさとの森の家に悲しき日を送
れるあはれなる兄にこの一篇をおくる

81 ふるさとの森の藁家の片びさし古りにけむ
かも久に見ぬ間に

82 鳴く蟲のいのちはそりて逝く秋は風もかな
しく吹きわたるめり

すゝけたるらんぶの下にあつまりて親子さ
びしく夕餉食すらむ

親子みたり夕餉食す夜をこがらしの風さむ
からむ森かげの家に

83 椎の實の屋根に落つるをきゝながら繩なひ
てあらむ冬の夜寒を

ふみは讀めず友しなければ繩なひて夜をふ
かすらむ冬の夜寒を

よなべして夜ふかす冬の森の家にさぶしき
ものはこがらしの聲

爐の中の栗の焼くるをまちかねて火をいち
もらむこころせよ兒に

燃えきれし椿さしそへて爐のほとりわれの
噂をしてあるならむ

あしびきの山こがらしの寒き夜は酒あたゝ
めて淺宵を寝な

畑には大霜おけり早起きを山ゆくと兄は鎌
とぎゐるか

庭の木に馬を繋ぎて鎌とげば兒は見て立た
む兄のかたへに

萱刈ると山にのぼれば山風の身にいたから
む家に見おきて

86 馬棚越しに麥食む馬の額ひたひた白撫で、立つらむ
兄はさびしく

食みこぼす飼葉まちつゝ馬棚の下に雀群れ
よる陽はかたむくに

立てかけて壁に干したる胡麻の實のおのれ
はじけて散る頃ならむ

背戸の畑二

ふるさとの兄をおもへば眞竹籜裏山にして
さやげるきこゆ

87 裏山をよもすがら風のすさぶ夜は吾をしの
ぶらむあづまのわれを

88 背戸畑の金柑の實の黄に熟れて秋日したし
き頃にもあるか(舊の金柑の木は古木にて
幼き日の思ひ出ふかして)

つよら實のきんかんの黄に入日さし垣のそ
とより竿うごく見ゆ

秋晴れの日和うれしみ姉とふたり畑打つら
むぞ日おもての畑に

くすりやの富山の爺のくるころは蜜柑黄ば
みて秋の祭り近し

くすりやにもらひ集めしにしきゑの役者の
似顔今もわすれず

89 畏かけて鶴つるとりにしありし日の思ひ出かな
しふるさとの山に

10 幼き日の捉迷藏をなつかしみ裏の小山をおもひ居りわれは

弟と枝にのぼりて實をもぎしあの九年母の木はあるか今も

小山田の田の面をとざす薄氷を打ちくだきつゝ田を打つかひとり

こがらしのふきのをやみのしづもりに背戸の林にきゝし鳥

天遠き父母のおもわの眼には見ゆねざめにはみゆこのごろ夜ごろ

91 よみかきを多におぼえてちゝはゝの心にさかる今しくやしも

農商務省の三階にて

すめろぎの離宮の樹空秋晴れてひかりか
 やく入海の波

入海の夕照りかへす沖つ波ひかりきらひて
 渚べに寄る

春近き日に

まんまんと湯へあふるゝ朝の湯にめざめう
 れしきからだをひたす

93
 柚子の香のにほひかなしも朝はやく眼鏡を
 かけて湯にひたり居り

84
すつきりとすみ湛へたる柚子の湯にからだ
浮かせて物思ひもなし

曉起はやおきのからだひたせば朝の湯の光りふくら
みあふれんとする

朝の湯に浮きてたゞよふ柚子の實のきんの
肌へにさす日の光

軒をめぐる小鳥のかげのたまたまは湯の面
におつれ硝子戸を透き

みなぎらふ朝の柚子湯に身をしづめ流れこ
ぼるゝ湯の音きくも

85
こころよき疲れおぼえておのづから朝湯の
なかに眼をつぶる

大正七年元旦試作

庭の木に小鳥とびかひ鳴くこゑもけさはま
さりてのどかに聞こゆ

端坐して耳をすませばものゝ音のかそかに
とよみ年立つらしも

築地河岸

朝霧のやゝになびきてほのぼのといま見え
そむる大甍かも

87 霜ぐもりそらをひたせどそゝり立つ甍は高
し築地本願寺

88 築地がし異國女の青服の陽にしたしもよ秋
の薄日に

夕くれば遠しら浪の汐照りも寄りて幽けし
稻荷の宮は

寄る波の銀の潮騒さむざむとゆふ日が磯の
波除稻荷

今村沙人を送る

大正七年一月二十九日友人今村沙
人君倫敦に赴く。送別の歌より

めぐし兒を都におきてとつくにのいくさの
國にいで立つ君は

99 酒あげて君送らむとまつのうち都大路の
霧の夜を來し

あつまりて酒はくめどもちまたには松は立
てどもさぶし今宵は

ゆくすゑを幸ある君とおもへども今宵くむ
酒の何かさぶしき

寂しければ酒はのむとも酔ひしれてうたひあ
りきそ英吉利の街を

いざりすは冬ぞ寒けむ現し身の眞幸くあれ
やまた逢ふまでに

この春はわが山家戸をひらき置きて君が消
息を朝な朝な待たむ

朝鮮人蔘を煮つゝ

夕庭の檜の上枝よりさらさらにしづるゝ雪
の風巻しらじら

雪にあけ雪にくれゆくこのひと日薬のみつゝ
ゝ寂しさ湧くも

煮えたぎる高麗人蔘の香はしたしねざめさ
ぶしきわが枕邊に

ひとときは眠りしものかふつつふつに薬煮る
香のいまはきこゆれ

夕戸出の妻をまちつゝひとりゐの心さぶし
く人蔘を煮る

104 我が宿の檜原にこもり鳴く雀いまはきこえず
すいねにけらしな

夜の雨

芝居はねて市路をかへる夜の雨傘にあかる
き音さゝながら

代々木野にて

樹の枝に馬をつなぎて晝の野に兵は語らふ
枯草を藉きて

105 相語る二人の兵の頭のうへに馬は口よせ話
し聞くけはひ

餘念なく二人はかたるかたはらに馬をたた
せてしづかに語る

語らふは葛飾の里におきて來しうからやか
らの噂なるらむ

立つ木々はみなはだかなり曇り日のうすく
落ちたるその木のかしら

思ひ出

浅宵を背戸田の水になやましく暮啼くころ
は人まち難し

春くれば懐かしき日の思ひ出に真間の江が
見ゆ筑波嶺が見ゆ

らんぶの笠を向け直ししみじみとふたり聴
きにしその夜の蛙

家をめぐり蛙なく夜のなやましき灯をとも
すさへ悲しかりけり

凍土こゑどのいまは割れたる蓮田に妻として見る
筑波の山か

ゆふ近しかの小筑波にゐる雲の片照り寒く
なびきつる目を

いつぼんの道の長手に人は来ず待つひと
は来ず起ちてもゐても

109
別れ来てかへりみすれば夕霧のなびくとは
すれ妹が家のあたり

妹がりと道の長手をいそぎつつふりさけ見
れば雪かつぐ山

棲木に白き小鳥のつがひゐて眼をつぶるよ
りかなしきはなし

苗うりのこゑはよろしも朝床にめざめてき
けばことによろしも

射的場の圃に入れる兵ひとりどんたくの午
後の曇り寒しも(入景園射的場二首)

松山の山裾並めて立つ射的射的の羅馬の文字が
こゝよりも見ゆ

大正七年三月作

半島の春

四月六、七日本山白雲石川寅治其他の諸氏と三
浦半島を巡遊す

あきつしま皇國をまもる浮城のこのいくさ
ぶねは見るに雄々しも(横須賀)

曇り日の浦賀の岡の山ざくらほころびそめ
てゆらぐともなし

海近き山の遠樹とんじゆのしかすがにわが眼にかな
し花咲かんとす

蛸壺を焼く竈のけむり傾きてほのかにのぼ
るこの薄れ日に(久里濱)

春雨に花は咲きたれ山かげに諸葉かぐろく
椿はあるも

114 椿山この春さめにくもりつゝわが行くまへ
に砲車ひく兵

うらがなしこの山坂に歩き疲れ足どりおも
き落伍の兵を

半島のくもり久じき春の旅こゝよりもまた
浪の音きこゆ

春さめに濡れてけぶれる相模野は葉山しげ
やまみな木の芽ふく

峽田をたがやす男ひとりなり待つ妻のあら
む簀かげの家に(下浦附近)

115 男きて畔塗る春の小山田に鳴かぬ鴉の歩み
さびしも

はるかなる山の峽間に立つ煙こゝにも人の
わび住むものか

年かけてねぎつるものを相模なる三崎の海
を今ぞわが見し(三崎)

音にきく三崎のうみの城ヶ島いまはまさめ
にわが見るものか

燈臺の青き光のをりをりにくるめく見つゝ
われら酒酌む

朝立ちの町のはづれの麥波に雲雀の唄をき
ゝつゝ行くも

やはらかに草食む牛に照る日ざし眼下には
見る春の小灣(網代小景)

118 帆船の丹塗りのふねの波にうきてこの小灣
の真晝さみしも

○

うつゝなく鴉あゆみてゐたりけりさゝら波
寄せて渚は遠く

木蓮の花

木蓮の咲き照る花はゆゝしけど咲き極まり
て散る日近からむ

119 なやましきわが下情したじやうほとほとに揺れのもの
うき木蓮の花

さく花の光まさびしむらぎもの心おさへて
 晝佇ちつくす

ふかぶかと陽照る青木の木の間透きて木蓮
 しろしこの朝空に

わが眼には光いたけれ花の上のみそらしづ
 かに春日ながらふ

こゝろもちあつみをもちて春の日に咲きか
 きはまる木蓮の花

春 満 し

春の日のひねもす照ればおのづからいのち
 めぐりて草土をい

コノ句良し

山かげは未だ寒けど天に向きて芽ぶかぬ木
々はひとつもあらず

わが軒に葉をくはへてくる鳥の羽ばたき
こゆ朝の目ざめに

硝子戸にかげさす庭の裸木の揺れこまかな
り朝の目ざめに

山
皴
の
光

大正七年作

大正七年五月より
大正七年十月まで

馬市

なつかしきは故郷の夏の馬市なり。ありし日を
思ひ出でてよめる歌の中より

この夏の馬市たつらしもうらわたす道の長
手を駒引くが見ゆ

120
村々の家の若子がひく駒のいななきよろし
朝のはやきに

嘶けばいななきかへすこゑごゑの村に響き
て馬市たつらしも

父としてひなの乙女がひく馬の踏み鳴らす
里の板橋の音

親馬の道をいそげば霧にぬれて子馬もはし
るいななきながら

あさかせに嘶く馬の青駒はいさましきかも
こゑ澄みとほり

みやしろの庭の若木に風わたりうらぐはし
もよ並みある駒は

おほらかに市場の庭につらがれて足掻させ
わしき赤駒青駒

あるものは朝まだきより山越えて遠來しな
らむ汗ばみてゐる

あるものは背の日蔭の青柴の陽に照らされ
てうちしなへたり

吾が行けば馬柵の上より頸のべてかなしき
眼して寄り来るものを

顔あげて吾を見る目見の愛しさに誰が家の
小馬ぞこの小馬ほしや

おふしたてし村一番の馬の子をしたり顔し
て引きゆく叟は

みちのくの馬商人と長をちと市たつ晝の辻
の立ち話し(長をぢは村の老伯樂)

馬市二

栴檀の木蔭しめりて晝深し事負の牛は眼を
つよりゐる

そがひには樹群のみどり日にしたしつなが
れてゐる一びきの牛

おほどかに繫がれて立つ牛の背のつややか
にして陽は木洩れつゝ

袖のなかに手をと리카はし佐吾十のさゝや
きあへる陸奥の馬樂

國なまりこの馬樂の赫顔も去年見てしより
われにはしたし

なにかしも濁聲あげてはくらくののゝしる
見つつわれは寂しも

評價する人のこゑごゑうちまじりおぞまし
きかもその争ひが

けうとけき人に賣られてけふよりはこの白
仔馬の親なしにあはれ

掌を拍ちて馬あきなひをする人のおもわさ
びしき真日のしづもり

掌を拍ちしあとの寂しさ吹きとほる風のを
やみに馬の嘶くこゑ

黄牛の斑のまばらなる柔き毛に葉の影布き
て晝の陽しみら

仔を賣られ引かれてかへる親馬の畜生の心
かなしかりけり

賣れのこりし馬牽てかへる若者は馬の頭を
撫でつゝ行くも

馬の市いまははてたれ人ごゑの夕ひそまり
て水を汲む音

たそがるゝ村の小家の桔槔はなづか今はこたへてを
ちここに聞こゆ

裏畑にそだちおくれし茄子苗に水やりをれ
ば空夕焼す(畑一首)

五月の野を行きて

稀人をこころにもちておぼつかな曇り久し
 きこの朝空を

雲のかげやゝにとぎれてさつき野のわがゆ
 く道に光は動き

明るみのよどみひろがる野の面にさやかに
 麥の穂を揺する音

うすあかみ實りゆたけき麥波にこの五月野
 の秋は近からむ

見はるかす麥生のをちに雲の動き聳立つ竹
 はそよぐともせず

靡き立つ野の篋たかひらの照りこもり晝ふかしもよ
行く人稀れに

おのがじし土をかづける竹の子のいとしく
なりて林に入りつ

目路ひらく麥生黄ばみてぬるみ風音かぜの幽こもりけ
しも晝の野わたり

野の道のしろき長手をゆく我を追ひ越す雲
の影のさびしさ

うら枯れし蒨あざ葎れん草くさの莖立ちの揺れてをなび
く畑のなぞへに

麥の穂のかなた並み立つ槻の木きの葉照り美うつく
しも我等野を行く

にひばりの埴道あかし道の木の槻のうれ葉
に眞日はかぎらふ

大佛の丘の松山墓原の西にならびて没つ日
に映ゆ（大井大佛にて）

洗足池

洗足池は東京府荏原郡千足村にあり、人多く知らざれども清澄愛すべし池畔に海舟の墓日蓮の遺跡あり、大正七年五月十二日歌の友と相携へてこの池に遊ぶ

はしけやししま近き里に湛へたる大沼オホヌマの水を
今ぞわが見し

さゝ濁るさつきのいづみ草を浸しほのかな
 るかも林の中に

いくうねり池のほとりを歩みつゝうつゝに
 聴くは松風のこゑ

おくつきのうしろ夏草高く繁り畑につらき
 て風になびかふ(海舟墓二首)

かへるでに照る日みづみづしこの丘の勝ちの
 あそみが奥津城どころ

吹きとほる池の軟風そよそよに身のゆるび
 さへ今はうれしも

沼隈の水錆べる小田にひとしきり蛙なくな
 りこの真晝間を

水近く青草のかげのゆゝしけばわが身いと
ほしむ心しきり荐なり

さざ波の池のほとりに夏草の青さをしきて
飯食すこゝろ

草藉きてかたみにうたふうた聲の森にひと
きて心はなごむ(友と唱歌などうたふ)

かたくなの我の心のやゝに動きうれしくな
りてうたをうたひぬ

眞澄み空照る日とともに生れいでし君が若
子をまささくあらしめ(友に)

山皺の光

病弟看護のため妻を國へやりしが病容易にいえ
ざるため養家との間おもしろからず其事の解決
のため自らも歸國す、神戸にて船に乗りしは八月
四日のことなりしとおぼゆ

入日さす島の山皺あかく染まり木棉波雲の
歩み遅しも

ゆふ空に片照る雲のあゆみ遅く帆をおろし
たる帆柱多し

暮れなづむ内海原の島山にあかくよどめる
山皺の光

島山は夕日に映えて玉藻よし讃岐の海を榜
ぎたむ小舟

ゆふかけて磯回しをれば揺麻漉いく浦かけ
て松つれく見ゆ

宵ながち秋風はふけ海峡 汐照り寒しわが
ゆく船を

船並めて早瀬をくだる舟人の横顔さびし秋
風の海に

呼びあひてかたみに語る舟人の榜ぎ別れつ
ゝたぎつ瀬に入る

沖の海に釣する小舟わが船に向ひて子等が
両手ふる見ゆ

島山にゆふべをなびくなりはひの煙を見れ
ば人の戀ひしも

山裾に小家かなしもよりそひておのがじし
立つる煙は青く

ほのぼのと夕焼赤し月まちてこの静か夜を
高濱に行かむ

甲板より見下ろす秋の渦潮に海月浮きたり
港はちかく

✓
ながれつゝたゞよふ海月おびたゞし汐照る
海に陽はゆふばえて

たぎつ瀬の潮沫しろし瀬戸の海や八十島か
けて灯すいさり火

浪まくら旅寝ものうき夜泊りに節のかなし
き荷揚唄きくも

近江八景一

名にしおふ磯には來つれ唐崎の松の夜さめ
は聴くよしもなし(三首唐崎)

おもしろき松の枝かも草枕旅のたよりをふ
るさとにせむ

唐崎の水隈の眞菰うちなびき起き返らむと
風間まぢをる

たもとほり友と來りて果樹園の高きに上り
園見するかも(試験場園山果樹園にて)

見渡せばゆたかにみのるたなつもの近江の
園は豊秋なるらし

14 湖ちかく稻田つゞきて松多し近江のくには
ゆたけき美²國¹

穂につゞく田居の夜空を羽並めて雁わたる
らむ月照る夜ごろ

比良山に未だも残る日のいろのかぎろひ淀
みいよよ寂しも(比良山遠望)

坂本の夕日が浦に風おちて帆を捲く音のさ
むくしきこゆ

近江路は花^み崗^{かみ}群^{ぐん}山^{やま}幾尾かけて嶺^{たね}呂^ろけざやか
に松の間に見ゆ

155 すみわたる秋空かぎりたたなはる遠山が嶺
はしろしさやかに

眼の下に屋並の色のうつりかはり移らふ並
べに光る湖の面(二首三井寺にて)

没日さす街のなぞへにしづもりて夕疑る湖
の照り返す明さ

夕まけてしづもる湖の水照りにうつらふ雲
の動くともなし

秋のうみをわたりてひらく鐘の音もゆふべ
はさむき水明りかな

灯の入りて何か悲しき膳所の町妻もろとも
につかれてかへる

近江八景 二

曉近く眠り足らひてほのぼのと目ざめし床
にきく車井戸(四首友の家にて)

湖に来て一夜ねしゆるあかつきの井戸の音
さへ身にしみてさみし

友の家に寝ざめうれしきこの朝け雄々しき
ものかか鶏の高啼き

喉太にうちのかげ啼けりなきやめば隣の鶏
がついきて啼くも

目ざむれば裏の畑に茄子もぐと妻よぶ友の
こゑのきこゆる

16) 屋敷町の草家の庭の朝かげにともしかれども
も鶏頭はある

車ひく牛のそがひに見遙かす群山しろし松
の間に遠く(三首粟津)

いづくよか粟津の松に風のわたるこの寂し
さを誰に告げやらむ

鳥かへる西の樹空に煙なびき夕日をわたす
瀬田の唐橋(舟にて瀬田橋下を過ぐ)

中空にゑがく欄干の弧の圓み漕ぎ廻み見れ
ばおほどかに懸る

湖の面につづくえりの簀さむざむに水明り
してさゝ波はよる

えりは魚をとるために湖に
立ち列ねたる簀の子なり)

藻刈舟いまだ歸らず湖いちめんいざよふ波
はたゞに照り返す

さゝ舟に藻を刈る男ひとりなり陽に立つ波
のかざりしられず

船に寝て仰ぎ見すれば比叡が嶺の四明が嶽
はわが眼にさやけし

遠空をさやかに限る比叡が嶺を歌によまむ
と思ひつつ見る

息づける汀の水泥晝臭しつかれてかへるわ
が眼のまへに

大正七年一月作

○
ほのぼのと岬のうしろに朝夕のたゞへて海
はしづけさにある

風邪ひきて死ぬ人多しむらぎもの心おびえ
てかづく衾を(感冒)

爐邊

大正八年作

大正七年十一月より
大正八年二月まで

爐邊一

わが弟の病を看んと、母なく同胞もなき故郷の家
にひとり歸り行ける妻に與へる

167
はるばると海山越えてかへれども父母はな
しさよの小床も

朝夕のわびしき看護かんご汝れがつくす心およそ
にわがもふべしや

寒き夜は折り焚く柴の煙にむせび涙拭はむ
心あり難し

圍爐裡いろうりべに繩なは綱なはふ兄と姉の眼がゑみかはし
たる霜夜しもやこほろぎ

楯たての火はほのぼのぬくしつゝれさす針の手
やめて物言ふ汝れか

爐いの中にうづめし芋の今は早や焼けふくら
みて灰爆はいせにけり

兒こにやると息ふきかけて焼芋を掌にとれば
芋のぬくときものを(兄に一女あり、千鶴)

(今年四歳ならむ)